岐阜大学附属図書館報　ISSN 0915－8960

寸　胴

THE GIFU UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN　第17号　1995.10

目　次

知の精霊の生きる場所　林　正子 …… 1
館蔵資料紹介No.8
　生田正庵旧蔵の書　安東　俊六 …… 3
教官推薦図書
　『大衆教育社会のゆくえ－学歴主義と平等神話の戦後史－』　森田　政裕 …… 5
　『ソロモンの指輪』と『ロン先生の虫眼鏡』　森脇　久隆 …… 5
図書館員から一言　鈴木　精一 …… 6
　辻　八月 …… 6
基本図書購入リスト …… 6
お知らせ …… 6

知の精霊の生きる場所

林　正子

＜魂の医薬＞、＜人生を映す鏡＞、＜精神と芸術の安息所＞、＜無知と戦う精神の武器（本）を入れる武器庫＞、＜死するものが生けるものの目を開ける＞場所……ヴィンフリート・レーシュブルク著『ヨーロッパの歴史的図書館』（宮原啓子・山本三代子〔訳〕国文社　1994.5）には、＜古い図書館＞のことがこのように記されている。古代から現代にわたる図書館の起源と発展を伝えるこの書物には、ヨーロッパ15ケ国49の伝統ある図書館が紹介されており、その豪華絢爛たる建造物、優美典雅な稀覯本の写真の数々は、読者の眼を惹きつけてやまない。

顧みれば、私自身のかつての留学地ミュンヘンのバイエルン州立図書館も、赴任地ハイデルベルクの大学図書館も、それぞれ素晴らしい建築と蔵書を誇っていて、そこに一歩足を踏み入れると、崇高な世界に身をおいたような厳粛な気分にさせられたものだった。それは大伽藍のごとき広大な空間の迫力ゆえと言うよりも、何世紀にもわたる人類の叡知が一堂に会することによって生み出された、アウラのような存在を感じたためだったのではないかと思う。

いずれにしても、記念建造物・芸術的文化遺産に数えられるそのバイエルン州立図書館の閲覧室で、大勢の市民や学生・研究者が、机上に所狭しと書物を広げ、熱心にメモを取ったり思索に耽ったり、ひたむきな面持ちで書籍をもとめて書架の間を何度も行き来する姿は、自分の目標を見失いそうになっていた10年前当時の私の目には、自らの知的世界を豊かに築き上げようとする人びとに共通の、生き生きと輝く表情、内発的な自己練磨のすがたとして映ったのである。

＊　＊　＊　＊　＊

私はここで、建築に贅のかぎりを尽くした歴史的図書館だけが＜図書館＞の名に値するものだと言いたいわけではない。本があり人がいて交流が生まれる場所なら、既に図書館としての機能が獲得されているわけであり、その真価は、華美な外観や蔵書の数だけで決定されてしまうようなものでは決してないだろう。

この３月までの１年間赴任させていただいたハイデルベルク大学［東洋学・古典学学部］日本学研究室（ヤパノロギー）は、街の中心部・歩行者天国の表通りと交差する通り――その名もアカデミー通り（シュトラーセ）に面した４階建ての建物の２階（１・３・４階は中国学研究室）に、18の研究室・講義室を持っている。1994／95年・冬学期現在、教授２名、助手２名、日本人教師２名、司書１名、秘書１名の専任と、ドイ

ツ人教師2名、日本人教師3名、客員教授1名の非常勤スタッフのもと、主専攻171名、副専攻61名の学生が登録して日本学を学んでいた。

1985年10月の開設時には、蔵書数もまさにゼロからの出発だったわけで、10年後、集合住宅の居間を改造したような4部屋の図書室に収納された書籍は20,000冊、「文学と社会」「女性文学と女性史」「日本人の自伝」という重点分野、「ドイツ文学の日本語訳」「原爆に関する文献」などの特別文庫も設置されている。

僅少スペース・緊縮予算という障壁の前で、関心もまちまち、研究テーマも百花繚乱の学生やスタッフのために、これだけの図書を収集し、整理し、保存して、利用に供してこられた司書の方のお骨折りは、想像を絶するものであったに違いない。その筆舌に尽くしがたい偉業に感銘を受けながら、実際に、私自身も多大の恩恵を蒙った。

担当科目［現代文学］［女性文学］において、現代の日本で愛読されている小説作品の傾向や特質を論じたり、大正・昭和戦前期の女性文学の系譜を紹介してゆく過程で、テキスト・研究文献に不自由したことは一度もなかった。また、担当科目以外にも、ドイツ人スタッフによる授業── 文学史の講義、明治期の歌謡や近代作家の書簡の講読ゼミを始め、治安維持法の公布から第二次世界大戦突入までの思想・歴史・政治の講義、明治以降の朝鮮・台湾における植民地主義のゼミ、竹内好　編集・解説の『アジア主義』（現代日本思想大系9　筑摩書房）の講読など── に参加したが、私の専攻などお構いなし、矢継ぎ早に疑問や質問を投げかけてくる学生たちの熱意に応えたいと願ったとき、適切な参考文献が揃っていることほど有り難いことはなかった。

このような次第で、1年間のハイデルベルク大学赴任期間中、体力・知力の両面でずいぶんとシンドイ思いもしたが、さまざまなジャンルの書籍を前にした悪戦苦闘は、自分の専攻分野においてもかけがえのない発想を培ってくれた。自分なりの文学研究方法の土台をしっかり固め、日本の小説を思想・歴史・政治など、本来隔絶しがちであった他ジャンルとの関わりのなかで相対的に把えなおし、比較文学の知識も身につけて、国際的・大局的な視点からその価値を究めてゆきたい── 実力・才能は棚に上げ、そもそもそんな夢を抱けるようになったのは、大勢の方々のご理解とご支援と……そして、必須文献の粋が集められたあのヤパノロギーの図書室── 読みたい、知りたい、学びたいとう素朴で内発的な知の希求を掻き立て、満たし、さらに掻き立てていってくれたあの図書室のお陰であったと、今、改めて感謝の念を抱かないではいられないのである。

＊　＊　＊　＊　＊

＜黄金よりも鉛が世界を変貌させ、また鉄砲の鉛玉よりも活字ケースの鉛が世界を変えた＞── 前掲書に引用された、G•C•リヒテンベルク（ドイツの物理学者・作家　1742〜99 ）の箴言である。印刷物が新しい思想や科学技術、人間の普遍的なこころを伝播する役割を担い、活字がその使命を果たしてゆくうえで、図書館が中枢の位置を占めてきたことは、今日、多くの人々が認めるところだろう。＜人間精神の偉大な産物＞が収集・保管・利用され、＜知識や教養を媒介する場＞として、図書館はこの地球に、2,000年以上も前から生きてきたのである。

しかし今後、日進月歩の科学技術、情報化社会の隆盛によって、すべてがコンピュータ化され、端末機さえあればどんな情報も入手できるなどという時代がくれば、建造物としての図書館は無用の長物と化してゆくのだろうか。実際に、自然科学系の学問領域では、つねに研究の最前線に在るために、情報獲得のための壮絶な努力が迫られていることは、この方面の素人にも想像に難くない。社会科学系の学問領域においても、程度の差こそあれ同様の側面を持っているに違いない。そんな熾烈な営みが続いてゆけば、やがて建造物としての図書館が、形骸化されてしまうのも時間の問題なのかも知れない。

だが、人間の知性とか情緒とかこころが生み出した領域に関わる身には、人と本が出会い、人と人が出会い、その交流のなかから人類の新たな叡知が生み出されてゆく場所として、図書館という知のトポスの存在意義が改めて認識されてゆくことを願わずにはいられない。

学術情報の迅速かつ正確な伝達を目指して、コンピュータ・システムが導入されてゆくことに異を唱えているのではない。ただ、そのコンピュータも情報も扱うのは人間であり、その叡知を生かすも殺すも人間であるという至極当たり前のことを想起するとき、図書館の存在意義をどのようにとらえるかという問いが、今、改めて私たちに向けられているように思われてならないのである。

図書館は知の精霊が宿る場所である。人が本と向き合い、人と出会い、自らの知的宇宙を生み出してゆくことによって社会と関わってゆく空間である。今や、定期試験前に図書館に結集する学生さんたちにしか、感じてもらえないことなのであろうか── 。

（はやし　まさこ：教養部助教授）

館蔵資料紹介 No. 8

生田正庵旧蔵の書

安東俊六

蒸し暑い6月の午后のことだった。

着任して間がなかった私は、蔵書を見てまわろうと書庫の中に入った。中哲、東洋史、中文と関係の図書を一通り見て歩いたが、書架には唐本の類いが全く見当たらなかった。係の方に尋ねると、一階の雑誌の奥に別置してあるのだという。当時の長良分館は二階が書庫の入り口になっていた。狭い階段を降りると、一番奥まったところに唐本は置かれてあった。帙のないものも平積みもされず、スチールの棚に押しつめられたように立てられていた。つい先日まで帙が整然と列んだ書庫に出入りしていただけに、私には目の前の本の列は、何とも貧相に見え、痛ましくさえ思われた。

しかし幸いにも唐本の保存の状態はよかった。殊に文学や史学の関係の本にはほとんど虫の損じたものがなかった。ただ、哲学の棚の前に立ったとき、目立って虫の損じた本があるのが目をひいた。その本をそろりそろりと棚から引き出してみると、虫こそいなかったものの、綴じ糸さえ切れたところがあって、すぐにも繕わなければならない状態であった。そのままかかえて事務室に運ぼうと明るいところまで持って出た。そしてそこでふと目にとまったのが、表紙に押された昌平坂学問所の印であったのである。どうしてこんなところにこんな本があるのだろう。私は不思議な気がした。さきほど来、丹念に見てきた唐本の中には、見るべきほどの珍しいものはなかった。殊に自分の専門の文学にいたっては、全くと言っていいほど本がなかった。なのにこの印である。まるで狐にでもつままれたような思いで事務室にかかえていって虫つくろいを依頼した。

それから数年後のある日、九大名誉教授の荒木見悟先生からお手紙をいただいた。岐阜大学に生田正庵旧蔵の書物があるはずだ。ご遺族がそうおっしゃっているということであった。私は図書館に行って尋ねた。長く勤めておられた方に伺ってみたが、その方は覚えがないという。もっと古い方に聞いてあげましょうと問い合わせても下さったが、それでも結局分からなかった。私は已むなく、調べてみたが分かりませんと、荒木先生に手紙を書いた。そして投函した。

手紙を投函したあとで、もう一度荒木先生の手紙を読み返してみた。そしてその時ふと頭に浮かんだのが、例の昌平坂学問所の印のことであった。私は図書館に走っていった。書庫に入ると、棚にはあの『遜志斎集』がつくろいもされぬままにもどされてあった。はやる気持ちを押さえながら、本に押された大学の受入の印を見た。昭和24年6月10日受入とあった。事務室で受入の原簿を見せてもらうと、あったあった、同日に購入した32部の書名がそこには列記されてあった。先に私が尋ねた館員の方も、恐らくそれでしょうとおっしゃる。ともかくあった。原簿のその部分を写させてもらって、荒木先生に送った。

登録の順序は、史部・集部の別でもなく、また時代の順でもないが、敢てここで列べかえることはしない。今後この旧蔵書を調査する人の利用の便を考えて、登録番号とともに書名を列記しておくことにする。

14669　『章氏遺書』
14670　『毋不敬斎全書』
14671　『東漢会要』
14672　『唐会要』
14673　『五代会要』
14674　『西漢会要』
14675　『二程全書』
14676　『居士伝』(和本)
14677　『邵子擊壤集』
14678　『象山先生全集』
14679　『学蔀通弁』
14680　『陽明先生遺言逸事弁證』(鈔本)
14681　『七十二朝四書人物考』

14682　『三魚堂集』
14683　『龍谿王先生全集』
14684　『敬軒薛先生文集』
14685　『陽明先生全書論考』（鈔本）
14686　『四書朱子異同条弁』
14687　『性理大全』
14688　『朱子文集』
14689　『明史』
14690　『遜志斎集』
14691　『皇朝通考』
14692　『杜氏通典』
14693　『馬氏文献通考』
14694　『皇朝通典』
14695　『皇朝通志』
14696　『鄭氏通志』
14697　『欽定続通典』
14698　『欽定続文献通考』
14699　『欽定続通志』
14700　『朱子語類』（和本）

これらの中で『陽明先生全書論考』と『象山先生全集』の二部の書は、特筆して誇るに足るわが図書館の宝だと言えるであろう。

『陽明先生全書論考』は、題が語るとおり、王陽明研究のノートである。あらためてことわるまでもなく、世に一部しか存在しないものである。それを蔵しているのであるから、心して大事にせねばなるまい。

『象山先生全集』は、陸象山の文集を精査された九州大学教授・福田殖先生のご教示によれば、他に存在の知られていない明版であるという。『象山先生全集』の名で刊行された明代の三種の刊本（正徳16年刊本、嘉靖38年刊本、嘉靖40年刊本）のいずれともこの刊本は異なっている。因に当館の蔵する『四部叢刊』所収の『象山先生全集』は、福田先生のお説によれば、嘉靖40年刊本の系統のものと考えられるそうだが、試みに対校してみれば瞭然、体裁からしてこれとは明らかに違う。

大事にすべき本をもう一部付け加えれば、先に記した昌平坂学問所の蔵書印のある『遜志斎集』である。この本はどのような経路で正庵の手に渡ったのであろうか。荒木先生のご調査でも明らかにならなかった、岐阜大学が正庵の蔵書をどのようにして買うことになったかということとともに、興味は尽きない。

最後に、荒木先生の書かれた「生田正庵小伝」（『中国哲学論集』8号・1982年10月）に據って、生田正庵を大まかながら紹介しておこう。

生田正庵は、明治3年10月25日、兵庫県田原村に生まれている。歿したのは昭和11年6月28日、東大附属病院に於てである。享年67。幼名は喜市、のちに中孚と改め、通称は格、正庵はその号である。農村の地主の子であったようだが、明治17年（15歳）岩国の西郊に私塾を開いていた東沢瀉の門に入っている。この年沢瀉が閉塾して隠遁生活に入ると、沢瀉の嫡男正堂（名は敬治）の證人社に入って指導を受けている。正庵が東家の私塾に滞ったのは約2年で、一旦帰郷して独学自習の生活に入ることになる。明治23年（21歳）、急に思い立って、長崎県針尾島の楠本碩水に手紙を出して入門を願っている。碩水は朱子学を信奉し、沢瀉は陽明学を信奉していたが、この両碩学は学派の違いを越えて親交があったので、正庵もその縁で碩水の名を知り学徳を慕って入門を願ったものと思われる。碩水はこの願いを快く受け入れ、その師弟関係は碩水が歿する大正5年12月23日まで続いている。この間正庵は、明治41年（碩水77歳、正庵39歳）と大正元年の2度針尾島に碩水を訪ね教えを乞うている。また頻繁に楠本家の蔵書を借覧しては筆写し、整本架蔵している。

これは明治30年代のことだと考えられるが、正庵は京都に居を移し、南禅寺の毒湛老師に参禅し、5、6年間熱心に居士としての生活を送っている。先掲の蔵書中に『居士伝』があるのもこの為であろう。

正庵が東正堂の勧めによって上京するのは大正6年頃のことである。東京では雑司谷に居を定め、のちに吉祥寺に移っている。特に定職はもたず、陽明学会の有力メンバーの一人として、自宅その他で会講を持っていた。雑誌「陽明学」は東正堂の畢生の事業であったが、正庵はそのよき相談相手として、雑誌編集や集会連絡に関与している。

針尾島の楠本家とは、碩水歿後も碩水の甥正翼との交友が続き、大正8年東京帝大に進学した正翼の嫡男・正継がその講筵に列するようになる。正堂と正庵は正継の向学心に応えようと格別に意を用いて、正継の都合のよい時間に講義をあわせたり、指導方法を相談したりしている。

正庵の長女・生田正子氏は、すでにお亡くなりになられたが、蔵書の残りは、全て九州大学が譲り受け、目録もできている。末尾にそのことを記して、後に研究される方に供することとする。

（あんどう　しゅんろく：教育学部教授）
（配置場所：特別資料・フィルム庫）

教官推薦図書

教官から，その専門分野を専攻しようとする学生に先ず薦めたい入門書・基本図書，あるいは，より多くの教官・学生に教養書として是非一読を薦めたい図書を紹介していただいています。

『大衆教育社会のゆくえ－学歴主義と平等神話の戦後史－』

（苅谷剛彦著　中公新書 1995年）

森田政裕

今日学校教育が曲がり角を迎えていることは、大学改革の渦中にある我々の立場からも切実に実感される。受験戦争の激化とそれに起因する偏差値教育の仕組みを改め、子どもの個性・創造性を伸長する新たな教育体制の確立が要請されていること、さらには学歴主義社会から生涯学習社会へという社会の枠組みそのものの転換が必要であることについては、大方の合意が得られているといえよう。

しかし、そこで見落とされた問題はないのであろうか。経済的貧困の問題が表面的には解消されたかに見える現在、「階層と教育」の問題が注目されることは少ない。にもかかわらず、社会階層によって依然教育格差が存在することは否定しがたい事実である。こうした「階層と教育」の視角から今日の教育改革の方向を見直した時、学校教育による社会的不平等の再生産がより一層深刻化する可能性のあることを指摘したのが、苅谷剛彦氏の上記の著作である。

学校教育の量的拡大＝大衆化とそれに連動したメリットクラシー（業績主義）の浸透＝大衆化を特徴とする「大衆教育社会」が成立し、しかも「だれでもがんばれば」という平等主義の教育理念が学校文化を支配したことで、日本においては努力次第で学校教育を通じた社会的生まれ替わりが可能であるとする考え方が定着した。その結果、学校教育への期待のみが先行することとなり、社会的不平等が解消されたわけではないことは忘れられがちであった。すなわち、「大衆教育社会」が実現された今日にあっても、「階層と教育」の問題はなお問われ続けなければならぬ課題なのである。学校教育の改革が進む状況の下で、我々が見落としてはならない論点を提起したものとして、苅谷氏の著作は貴重なものであるといえよう。

（もりた まさひろ：教育学部助教授）
（配置場所：３階開架372.1Kar）

『ソロモンの指輪』*と『ロン先生の虫眼鏡』**

森脇久隆

動物を身近に見ることが出来る日常は楽しい。野生である方が望ましいことは言うまでもないが、勿論ペットでも構わない。たとえば私は18歳まで関西の田舎町で育ったが、（馬鹿にしてはいけない。現在では大阪から30分、某週刊誌の住みたい町ベスト10に常に入っている）、夏休みには大型犬を連れて川へ行き、一緒に泳ぎ下る－実はこちらは仰向けで浮かび下り、相棒は必至の犬掻き－が日課だったし、夜には魚を漁りに来たフクロウが、ツービートで鳴き交わすのを聞きながら眠った。通学路の並木路ではキツツキのドラミングが見られたし、冬の休日に友人宅を訪れ、山に入ると、キツネにお目にかかることも珍しくなかった。岐阜では伊奈波に10年近く暮らし、リスを見るのが楽しみだった。彼等が脱走者の野生化したもので、一部で迷惑がられていることは十分承知していたが、新緑の繁殖期に麓まで下りて来て、電線やベランダの上を走り回り、小犬のような声で鳴くのを聞くのは、やはり良いものである。

さて、表題の２冊の本である。前者はノーベル賞学者コンラート・ローレンツの著書として余りに有名であり、後者はSF作家光瀬　龍の著書である。どちらも、動物との触れ合いの豊富な経験を記し、面白く読ませる点で、動物生態学の最高の入門書と思う。また、ともに「ミステリの岩波」早川書房の刊行というのが愉快である。どこから読み始めてもよいが、前者では太陽エネルギーのみに依存したミニ閉鎖生態系（テラリウム＝ミニ地球）の作り方、後者では猛禽類との接近遭遇が楽しい。素人が野生に介入することは厳に避けねばならず、私達は野生動物さえ見ることの少ない環境に暮らしているが、そういう飢えを満たすためにも、時々書棚から引っ張り出してはひもといている。

（もりわき ひさたか：医学部助教授）
（配置場所：*３階開架481.78Lor,**３階開架480.498Mit）

図書館員から一言

鈴木精一

平成7年4月に医療技術短期大学部から情報管理課総務係へ転任となりました。

図書館は岐阜大学に採用されてから、今回で2度目の勤務になります。その当時に比べ、今では図書館業務も電算化が進み、電子化情報時代と目覚ましく変化をしており、人間の能力の素晴らしさを痛感しております。

業務としては、直接みなさんと接することはありませんが、利用しやすい図書館に向け心掛けていきたいと思います。

（すずき　せいいち：情報管理課総務係長）

辻　八月

この4月に医学部分館の方に採用となり、主に相互貸借の仕事をしています。相互貸借とは、申込者が希望する雑誌の所蔵大学を探し複写を依頼したり、逆に他大学からの依頼を受けて文献を複写し発送する仕事です。

現在の私の喜びは、利用者の方からの「ありがとう」や「御苦労様」という言葉です。その言葉は、私を励まし、“もっと頑張るぞ！”という気にさせてくれます。新入りでミスも多く、落ち込みがちな私ですが、笑顔を忘れず、早く文献が届くよう努力していきたいです。（つじ　はづき：情報サービス課図書係）

基本図書購入リスト

資料選定委員会（平成6年度）によって選定された基本図書を購入しました。
ご利用にあたっては、OPACで所在場所等をご確認下さい。

アジアのなかの日本史（全6巻）	本館	術前術後の合併症マニュアル	分館
戦後日本における朝鮮史文献目録1945-1991	本館	続医薬品の開発　（全21巻）	分館
教育時論　大正6～9年期（全25巻）	本館	新生化学実験講座（全20巻38冊）	分館
地球環境はいま（ビデオ）（全37巻）	本館	原核生物便覧　全4巻	本館
画像解析ハンドブック	本館	Nineteenth century short title catalogue.	
情報システムハンドブック	本館	1816-1870 Vol.29-34	本館
デジタル信号処理ハンドブック	本館	Dictionary of Organometallic compounds.	
情報ネットワークハンドブック	本館	2nd ed. 5Vols.	本館
現代日本語方言大辞典（全8巻）	本館	Webster : A Philosophical and Practical	
日本美術作品レファレンス事典　絵画編 近現代	本館	IARC Monographs. Vol.54-55,57-58, 61	分館

お　知　ら　せ

・ビデオデッキの増設について

視聴覚資料の利用が増加していることに伴って3階視聴覚コーナー個人用ブースにビデオデッキを3台増設しましたのでお知らせします。

・情報処理教育用端末の設置について

情報処理センターのシステム更新に伴って今回情報処理教育用端末10台を目録コーナーに設置しましたので情報処理教育の自習に使用してください。また、OPAC検索用にも利用することができます。

・私費用文献複写機の移設について

これまで一階にありました私費用文献複写機は、10月2日より2階事務室南側に移設されていますのでお知らせします。

岐阜大学附属図書館報「寸胴」第17号　1995年10月31日
編　集　委員長：梶山雅史　委員：大橋英雄，山崎捨夫，森　生也，小林かず子，上口正昭
発　行　岐阜大学附属図書館
〒501－11 岐阜市柳戸1番1　☎058－293－2184